2023年に向けた釧路湿原の鳥類調査について

貞國　利夫*

かつて「不毛の大地」と呼ばれていた釧路湿原は、絶滅したと思われていたタンチョウが、1924（大正13）年に発見されたことを皮切りに、徐々にその価値や重要性がうたわれるようになりました。1935（昭和10）年に国の天然記念物として登録された名称は「釧路丹頂鶴繁殖地」と、ツルのみに関するものでした。しかし、湿原の価値は貴重なタンチョウのみならず、氷河期から生き残ってきた動植物や、広大な面積があるからこそ多様な生態系が構築されていること等、実に多面的であることが分かりました。よって、湿原の存在自体が希少であるとし、天然記念物の名称は1967（昭和42）年に「釧路湿原」へと変更されました。そして、1980（昭和55）年に、釧路湿原はラムサール条約（正式名称：特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に国内で初めて登録され、国際的にも価値があると認められました。1987（昭和62）年に釧路湿原は国立公園にも指定、さらに1993（平成５）年にはラムサール条約第５回締約国会議（COP５：通称 釧路会議）が釧路で開催されるほど、釧路湿原が注目されるようになりました。

ラムサール条約登録や国立公園指定のためには、釧路湿原に生息する動植物の基礎情報が必須であったため、多くの機関によって調査が行われました。当館も釧路湿原総合調査報告書（1975年発行）を始めとして、様々な調査を実施してきました。特に1970年代から1990年代にかけての動植物に関する情報は、当館の刊行物だけみても、かなり蓄積されています。当時は国立公園の指定やラムサール条約釧路会議の開催などの影響から、調査の機運が高まっていたのだと思われます。本年は釧路湿原がラムサール条約に登録されてから40周年です。また、2023年は釧路会議が開かれてから30年になります。あれから釧路湿原の生き物たちに何か変化は起きていないのでしょうか。

直線化された釧路川流域の河川や丘陵地からの土砂流入、湿原周辺の土地改良や開発による湿地の乾燥化などは、湿原の生き物に対し様々な影響が起きていると考えられます。また、30年前と比較すると、ヨシやスゲしかなかった湿地にハンノキ林が広がり、景観が大きく変わっている場所もあります。景観が変われば、そこに棲む生き物が変化することは容易に想像できるでしょう。釧路湿原に生息する鳥類において、国の天然記念物や環境省の保護増殖事業に指定されているタンチョウやオジロワシなどは、その法的根拠から継続的に調査がなされています。ですが、そうではない一般の鳥類についてはそこまで手が届いていないのが現状です。絶滅危惧種に指定されている鳥類も、最初は数多く生息していたのに、何かしらの影響で数が減ってしまったため指定されたケースが多いと考えられます。早めにその動向が分かれば、過度な保護対策を取らなくても良いため、人間活動とも折り合いをつけやすいのではないかと思われます。

そこで、釧路会議から30周年の2023年に向けて鳥類の分野では、過去に釧路湿原で行われた調査を踏襲し、鳥類の変化をみることにしました。調査範囲は釧路湿原全域を対象に、今年度から2023年度まで行います。調査時期は鳥の繁殖期に合わせ、６月上～中旬に実施することにしました。既に今年度は調査を終え、現在は調査データを解析しています。

調査中の様子

この調査の大変なところは、鳥たちが一番活発に鳴く時間帯に合わせて調査を行わなければならないため、夜明け前に起きて現地へ向かう必要があることです。この時期、３時過ぎには空が白みはじめ、３時半をこえるとずいぶん明るくなります。日の出前にもかかわらず、既に鳥たちは活発にさえずっています。そのため、起床時間が午前２時前だった日もありました。苦労した分、調査中に鳥たちの様々な姿を目にすることができました。例えば、カッコウの姿を発見したノビタキが、自分の巣に托卵されまいとして果敢に追い払う姿、濃霧で幻想的な景色の中、タンチョウやオジロワシの鳴き声が響いてくるなど…。

調査の成果は企画展や紀要などで報告していく予定です。鳥類の視点から、過去と比較して何が変化したのか、減ってしまった種や逆に増えた種はいるのか。そして、その結果は私たちに何をもたらし、考えていかなければならないのか。そのようなことを明らかにしていきたいと思います。

＊釧路市立博物館